

いのちの輝き

奨励	小崎 眞【ごさき・まこと】
奨励者紹介	同志社女子大学生活科学部教授 日本キリスト教団牧師

主よ、御業はいかにおびたしいことか。
あなたはすべてを知恵によって成し遂げられた。
地はお造りになったものに満ちている。

（創世記 1章1―5節）

はじめに

小崎と申します。今のお祈りにもありましたが、ゴールデンウィークで同志社女子大学も4月29日から長い休みに入り、あっという間に終わりました。今日、大学に向かう途中に観光客の人がたくさんいるのを横目に見て、もう1日休みがあったらどんなにいいだろうと思いつきながら今日1日を過ごしていますが、皆さん、このようなときに火曜チャペル・アワーにお集まりいただき、ありがとうございます。しばらく一緒に聖書の言葉に学び、耳を傾けたいと思う次第でございます。お集まりの方々のなかにはこの春、同志社大学の門をくぐられた方も多いのでしょうか。すでに数年の時を過ごしておられる方が多いのでしょうか。さまざまですが、新年度、1カ月が経ち、毎年、この時期は新たに希望に満ちた学生たちがキャンパスに足を運び、活気に満ちた新入生がピカピカと輝いている姿にたくさんのエネルギーをいただく時期かなと思います。1回生から2回生になった人、それぞれの学年を経過した人たちも新年度を迎えられましたね。私も学生時代、「今年度は頑張ろう」と思って心に決めるのですが、やがて秋風とともにその決意は失速することもありました。しかし、それでも春は再び、新年度は頑張ろうと思うような、私たちの生きざまのなか、いのちに対して不思議に力を与えるようにも思うわけでございます。そこで今日は「いのち」に関して一緒に考えてみたいと思った次第です。

「いのち」への眼差し

私たちが生きていとか、私たちが誕生するということにはどんな意味があるのでしょうか。聖書には天地創造を含めて人間が神によって造られたことが記されているわけですが、一体、いのちって何なんだろうということを考えてみたいわけです。少し前、新聞で衝撃的なニュースが報じられたことがございます（『朝日新聞』2007年8月6日付夕刊）。その事件に限らず、それ以降も、よく似たニュースを耳にするのですが、次のようなことが報じられておりました。15～17歳の少年数名が、公園で寝ていた男性に火をつけて殺害しようとしたのです。少年たちは「ホームレスが汚くて、町に迷惑をかけている、死んでも気にする必要はない」と話していたというのです。さらに新聞の報道によりますと、男性を襲う際、その少年たちの一人は「ごみ掃除をするぞ」と仲間に声をかけていたそうです。数年前のことですが、当時、15～17歳の少年たちは現在の年齢で皆さんと同じ世代になるのかもしれない。この少年たちの目に、ホームレス生活をしている人間のいのちがどうしてゴミと映ってしまったのでしょうか。しかし、この少年たちの眼差しを批判するだけでなく、私も含めて私たちの眼差しのなかにも、もしかしたら人のいのちをゴミとして見てしまう、あるいは言葉を換えれば、人のいのちを無意味で不用なものとして見てしまう、そんな眼差しが私たちの裏側にもあるのかもしれない。この少年と共通する思いが私たちの心の中にも眠っているのかもしれない。そんなことを考えてみたいわけであります。

ドラマ「安堂ロイド」からの問いかけ

昨年秋、あの「八重の桜」にはまって、新島襄の連れあいである新島八重のドラマを見ておりました。そのドラマを見終えた後、日曜夜9時から始まったものがありました。「安堂ロイド～A. I. knows LOVE?～」という、木村拓哉さんと柴咲コウさんが一緒に出ているドラマであります。ドラマの内容は、未来からやってきたロボット、アンドロイドという木村拓哉扮するものがいて、その人が、殺されてしまう天才物理学者・沫嶋黎士（まつしまれいじ）という人（これも木村拓哉が演じていたんですが）の婚約者・安堂麻陽とのラブストーリーを描いたものです。安堂麻陽さんを安堂ロイドが守るというドラマです。今ひとつ視聴率で伸び悩んだということでしたが、私は八重のドラマと同時ににはまっておりました。キムタク演じる安堂ロイドのセリフのなかに結構、いろいろ考えさせられるテーマがあったんです。何度となく放映された場面のなかに、安堂麻陽を守るがために派遣された安堂ロイド君が、安堂麻陽さんのご自宅にある時計を修理する場面があります。安堂麻陽さんの「もういいのに。その時計は壊れているんだから、どうせ動かないから捨ててしまおうと思っていたからほっといて」という発言に対して、その時計を一生懸命修理して時計を動くようにするんです。そして次のようなセリフを言います。「人や生物は生きていていい、誰かの役に立つ必要はない。だが、モノは違う。誰かの役に立たなければ捨てられてしまう。存在することすら許されない」。そう言って安堂ロイド君は時計を修理して動くようにするわけでございます。この言葉を少し読み替えて語り直してみると、こんなふうにもなりはしないでしょうか。「誰かの役に立つとか、立たないとか、こういった有用性・必要性のみで物事を見つめた場合、一瞬にしてその物事、その対象は私たちに対してモノと同じように、モノ化してしまう。そして役立たないものは捨てられていく」。

モノ化する「いのち」

冒頭に触れた少年の眼差しのなかに、そのようなものを読み解くことができないでしょうか。私たち自身の歩みを振り返ったときに、私たち自身の歩みのなかにも人をモノ化して見てしまった自分はいないだろうか。もしこの春に同志社大学に入学された方がおられるならば、「あの進路の先生の言うことは役立ったな、よかった。でも担任は意味分かんない。役立たない。あんな奴いてもいなくても一緒だった」という言葉を言ってしまったりしていなかっただろうか。あるいは、学生生活を送っていくなかで「あの先生はいつも困ったとき助けてくれるからいいよね、役立つよね。あいつはいい。でもあいつは役に立たない、意味ねえ」。それを友だち同士で言っていないだろうか。まるで手元にあるスマホのアプリのように「役立つ、役立たない、じゃ、ごみ箱行き」、こんなことを私たちはしてないだろうか。確かに私たち人間には、人間に対して役立つか役立たないか、そういう形で人間社会を発展させてきた経緯があるのかもしれませんが。そして人間にとって有効・価値のあるものを最高の価値のあるものにして、私たちはそれを評価してきたのかもしれませんが。しかし、その発想だけで物事を見つめていったときに大丈夫だろうか、ふと立ち止まる必要があるのです。そのような時代に、もしかしたら私たちは生きているのかもしれませんが。そんななかで、あの安堂ロイドの物語は非常に意味をもってこの時代に問いかけているように思うわけであります。

「いのち」の輝き

そこで安堂ロイド君が語った「人や生物は生きていていい。誰かの役に立つ必要はない」。この言葉をもう少し聖書との対話のなかで繙いてみたいと思うわけです、「人は生きていていい」ということを探るために。自分の子どもがずっと小さかったころ、赤ちゃんのころを思い出してみたいわけです。同時に、私たちのこの世界に赤ちゃんとして存在しているいのちを見つめたいと思うわけですね。赤ちゃんは一人では何もできません。自分だけでは何もできません。ある意味、人間の能力という判断基準で赤ちゃんを見た場合、赤ちゃんには社会的な有用性・価値などは何も確認できないのです。赤ちゃん自体は非常に弱く、不確かなものです。でも、この小さい赤ちゃんに対して大人たちは手を差し出し、何か働きかけてしまう。そして赤ちゃんを助けているようでありながら、同時にこの小さいいのちの存在から大きな力を、大きな元気を大人たちの方がもたらすことはないでしょうか。私は赤ちゃんが好きなので、カミさんと買い物に出かけて、赤ちゃん連れの人とエレベーターで一緒になると「ぶるる」とか言って赤ちゃんを笑わせるわけです。カミさんはそれを見て「やめて。ヘンな人みたいやから」と言うのですが、私が「ぶるる」と言って赤ちゃんが笑うと、こっちがとつともうれしくなって、また「ぶるる」とやるわけです。皆さんもそんな経験はないでしょうか。テストがうまくいかない、「勉強したって、どうせ」と思ったときに親戚の赤ちゃんを見ていたら元気になった、などという経験をおもちではないでしょうか。私たちは不思議と、この赤ちゃんという新しいいのちに優しい気持ちを与えられるわけであります。

声なき声に呼び出されて

私たちは人間に対して役に立つとか立たないとか、私たちが勝手に決めた価値判断で物事を判断し、それを絶対的な拠り所として人間のいのちを序列化し、人のいのちの利用価値を計算してしまう、そんな社会のなかに生きているのかもしれませんが。しかし、私たちがつくりあげてきた価値判断基準のみに収まりきらない世界が、事実、赤ちゃんの姿のなかにあるように思うわけです。赤ちゃんの姿は、そのようないのちの新しい息吹を私たちに示しているように思います。そして、私たちが勝手につくりあげた判断や理解を超えて、新しい語らひを私たちに語りかけているように思うわけです。

語らいと言いましたが、赤ちゃんのいのちのすばらしさに出会うためには結局、私たちは赤ちゃんのありのままの姿を受け止めて、赤ちゃんの姿、赤ちゃんの声を聴くことから始めるのではないかなと思うわけです。ついつい私たちの思いで判断しがちですが、そのような思いを一旦おいて、私たちをオープンにして聴くことから物事が始まるのかなと思うわけです。実はそうやって安堂ロイドのドラマを見返してみると、安堂ロイドさんは安堂麻陽さんの語りかけを一生懸命聴くんです。安堂麻陽さんは安堂ロイドさんに聴いてもらえることによってだんだんと元気になっていく。その逆もしかりなのかな、と思うわけです。私たちは赤ちゃんに語りかけながら、目に見えない、声にならない赤ちゃんからの声を聴くことをとおして、何か力を与えられているのかもしれない。

一人一人の「いのち」を見つめて

さて、私たちの学園の創立者・新島襄はその遺言の中でとても重要なことを私たち同志社に対して残しております。次のような言葉です。「同志社は発展にしたがって機械的に事を処理する懸念がある。心からこれを戒めること」。これを少し言い換えてみると、機械的に事を処理するというのは、自身の合理的な判断に基づいて有効性や効率性を求める姿勢

につながるように思うわけです。それは安堂ロイドではありませんが、そのような眼差しのなかではすべてのものが物体として見えてしまう、モノ化してしまう。新島はいのちを物体としてとらえる、モノとしてとらえる、そのような人間の思い上がりを見抜いていたのかもしれませんが。ゆえに彼は、機械的に事进行处理する、合理的に物事进行处理することを危惧していたのかもしれませんが。そして逆に、新島はそのような判断基準では、マイナスのイメージともされる小ささや「一人」という言葉に関心を払ったのかもしれませんが。そして、新島が「一人一人は大切な人」と語るその眼差しは、そのような合理性を打ち砕いていく眼差しであるのかもしれませんが。私たちはこの新島の眼差しに寄り添いながら、学んでいきたいと思うわけです。

さらに一歩踏み込んでみるならば、新島は一人ひとりというこのいのちを、モノローグ的な、独演劇的な、自己完結的な、そういう形で人間の存在をとらえようとはしませんでした。むしろ外からの声に開かれ、その声を聴く、そういう関係のただなかにいることを求めたように思います。それゆえ、新島のことを柏木義円が晩年、次のように評しています。「先生に至ては戸毎に説き人毎に諭す」（『上毛教界月報 復刻版』不二出版 1985年）。新島は一人一人との対話を大変重んじたように思うわけです。この対話というのは、相手の有効性などを前提として、相手をその有効性という狭い世界に閉ざさない姿勢ではないでしょうか。そして、むしろ多様な可能性や多様な声に耳を傾ける、そういう生きざまであるのかもしれませんが。どうか同志社大学での学生生活全体を通じて、自分自身が勝手につくりあげた価値判断で縛り、縛られて、相手のいのちをモノのように見つめるのではなく、ひいては自分のいのちをもモノのように見つめるのではなく、それぞれ外からの声に開かれるものでありたい。互いの声を聴き合うものでありたい。そのような多様ないのちの輝きをお互いに賛美するものでありたい。そのような自由へと新島は私たちを呼び、指し示しているように思います。このような歩みに連なる一人ひとりでありたいと思います。

2014年5月6日 今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録